The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	赤木昭三著『フランス近代の反宗教思想』書評
Author(s)	柏木, 隆雄
Citation	Gallia. 2015, 54, p. 29-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61926
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

赤木昭三著『フランス近代の反宗教思想』書評

柏木　隆雄

神の存在。霊魂の不死。今これを否定しても何の懸念もない。しかし宗教戦争後の17世紀フランスではきわめて剣呑、説の如何によっては投獄、火刑となった。

本書は、当時そうした危険を承知で、不信仰を表明したリベルタン（自由思想家）と称せられる人々の真の姿を、彼らの著作を精細に読み解くことによって明らかにし、さらに十七世紀末から十八世紀前半、秘密裡に筆写された反宗教的急進思想を伝える著作（いわゆる地下写本）に光をあて、その思想史的意義を現代に照らし出した画期的な著作である。

第一部は十七世紀の主要なリベルタン―詩人テオフィル・ド・ヴィヨーの奔放な主張の影にある厭世的宿命観、ノーデに代表される博学な人文学者たちの反キリスト的哲理、さらにあの鼻のシラノ・ド・ベルジュラックの奇想天外な著作を分析し、神、霊魂の不死に関して、彼らが当時「方法的会議」を打ち立てた巨人デカルトとは対照的な立場にいたことを明らかにする。そしてその世紀後半、主流となったデカルト哲学の「方法」の実を切り取って、自由思想と結合させたリベルタンたち、とりわけフォントネルの天才的な宗教批判の論理が、彼の主著の綿密な分析を通じて辿られる。

しかし圧巻は十七世紀末から十八世紀前半の地下文書を論じた第二部である。カトリックの教義に根本的な疑義をはさむゆえに公刊をはばかり、写本の形で一部の識者に読まれた地下文書は、現存わずかに一六三種、八四〇部。著者はそのすべてを校勘して主題と傾向を確定した上、代表的な写本八七編について詳論する。

霊魂不死の否定、諸宗教（とりわけキリスト教）批判、そして聖書批判といった、きわめて危険かつ重大な主題を扱うそれら地下文書は、穏健な理神論から急進的な無神論まで、当時の支配宗教の論理的矛盾を鋭く突く。それは公刊される地上の思想を半世紀先取りするのである。

デカルトからパスカル、フォントネル、ヴォルテールやモンテスキュー、そしてディドロらの啓蒙思想という十七, 八世紀の思想的変貌は、じつは「時間軸にそった水平方向ではなく、地下から地上への垂直方向であった」とする、従来の思想史を一変させる著者の結論は、膨大な資料の解読を背景にして、盤石の重みがある。

きわめて高度な内容を、平明滋味あふれる名文で解き明かした本書、現代の読書人すべてに、信条と生き方を問いかける正真正銘の「学術書」である。（岩波書店、八四〇〇円）

（『信濃毎日新聞』1994年3月13日版より転載）